

V 現職教育

1. 現職教育計画方針

石川県教育委員会及び教員総合研修センター、郡市小学校教育課程研修会、公開研究会、校内研究会・研修会など研修の機会を積極的に活用し、自己の研鑽に努める。カリマネの柱を研究の軸とし、各教科においてさらなる授業改善に取り組む。

2. 学校研究

(1) 研究主題・副主題

自ら考動し、表現する子の育成
～進んで学び、できた！を実感できる授業づくり～

(2) 設定の理由

本校では、学校教育目標「人間性豊かな児童の育成」研究主題「自ら考動し、表現する子の育成」に基づき、児童の心を育て、自らを律し、主体的・協働的に学習する児童を育てることを大切にしてい、学校研究を進めてきた。また、学力調査の結果等をもとに、各教科における課題を焦点化し、弱点である部分を補いながら児童に付けたい力が身に付くよう授業づくりを行ってきた。

本校の児童は学習に対してまじめに取り組む姿勢が見られる一方で、課題に対して自ら考えて行動したり、自分の考えを積極的に表現したりする場面に課題が見られる。課題意識が弱く、見通しがもてないことで、解決に向けた自己決定ができずにいたり、協働的な活動の場では自分の考えに自信が持てず、消極的になっていたりしている。その結果、学習が深まらず「できた！」という達成感につながりにくい実態が見えてきた。学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、児童の資質・能力を育むことの大切さが示されている。本校の児童がこれからの社会を生き抜くためにも、知識を受け取るだけでなく、学んだことを使いこなし、社会で生かしていく力を育てることが重要となってくる。

そこで、本校では児童が「自ら課題に向かい考えて行動する（考動する）姿」「学びの変容や成果を自分の言葉で表現し、学びの実感をもつ姿」を育成することを研究の中心と据えることにした。そのために、教師は「児童が進んで学びたくなる授業」「自分の成長に気づき、できた！を実感できる授業」を構築し、児童が主体的に学びに向かうための手立てを明確にする必要がある。こうした取り組みを通して、児童一人一人が学びの主人公として成長することを目指し、本主題、副題を設定した。

(3) めざす児童の姿



(4) 研究の重点

1 自ら進んでゴールに向かうための教師の手立て

○学習環境の整備

児童がゴール（学習の目的）に向かって学習を進めるために、掲示物、ICT の活用などを工夫し、児童の思考が促される環境をつくることで、主体的な学びを引き出す。

○自己決定の場の設定

教師は学習のねらい（付けたい力）を明確にし、その達成に向けた学び方を提示する。児童が自分で方法を選択することで、学習への当事者意識が高まり、主体的な取り組みが促される

○協働的な学び

児童同士の多様な考えに触れることで、思考の広がりや自己調整力の向上につながる。ペアやグループでの対話・比較の場を設定し、互いの考えを共有し合う場を設定する。

○子供に委ねる場面と一斉授業のバランス

児童に学びを委ねる場面では、児童の困り感やつまずきを見取り、必要に応じて全体で立ち止まり、理解度や達成度を確認する一斉指導を行う。

2 個の変容を自覚するための工夫

○児童の変容を表出させる場

自分自身の変容を、「何を学んだか」「どう変わったか」を言葉で表現したり、記録に残して見える形にしていくことで、自分の成長を実感させていく。

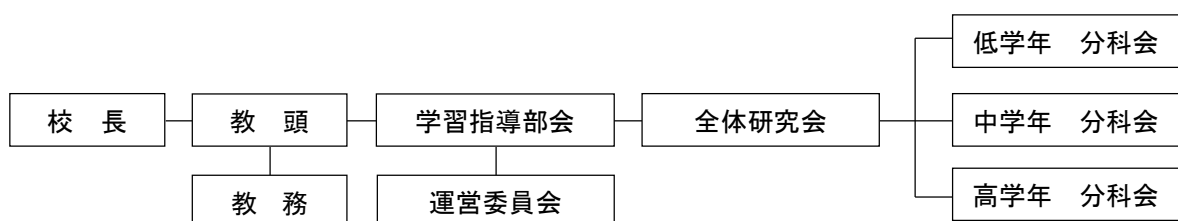
○教師の問いかけ

「友達の意見で考えがどう変わったかな」「今日の活動で一番成長したと思うところはどこかな」など、自分では気づけない視点に気づかせる声かけをし、考えを引き出していく。

○教師による価値付け

「考えが前回よりも増えているね」「友達の考えを取り入れて考えているのがいいね」など、児童の変容を価値づけることで、次の学びへの意欲につながる。

(5) 研究の組織



(6) 研究の方法

①各部会で研究の重点を具現化するための手立てを考え、実践の中で主題に迫る指導を追究していく。

②研究授業を通して、検証を行う。

- ・ 1 回の提案授業と年間 2 回の全体研究授業を設定し、共通理解を深めながら研究を進める。全体研以外は、ブロック研として実践する。研究授業の教科は問わず、各教科、領域で取り組むことを可能とする。
- ・ 研究授業の事前研・授業整理会は各ブロックを中心に行う。また、所属するブロック以外の研究授業整理会も積極的に参加し、感想を伝え合う。
- ・ 全体研究授業の事前研では、指導案検討、模擬授業を行い、全員で授業づくりを考える。重点に沿った授業づくり、について協議検討する。
- ・ 授業整理会では、研究主題・重点に沿った協議となるようにし、児童の変容をもとに授業改善に努める。

③相互に授業を参観し合い、授業力向上に努める。

- ④外部講師を招聘した研修会を行い、指導力向上を目指す。
- ⑤実践や取組の成果を以下の方法で検証し、授業改善を図る。

- ・児童アンケートによる意識調査
- ・めざす児童の姿と児童の実態の分析
- ・授業での発言や行動の観察
- ・児童のノートや振り返りシート、教師の見取り等

(7) 研究主題に迫るための方策

授業力向上に向けた取組

①子供が主体となる授業づくり

①各教科の目標を確認する。→②資質・能力（指導事項）を正しく捉える。→③資質・能力（指導事項）から、授業の終末の姿を具体的にイメージし、その姿にせまるための手立てを考える。→④振り返りを充実させる。（「主体的に学習に取り組む態度」を評価する視点を与える。）この一連の流れを基本に教材研究を行う。単元で付けたい力をはっきりとさせ、学習過程を掲示し、児童と共に見通しをもって学習を展開する。

②授業研究の充実

(ア) 模擬授業

全体研究授業の事前研では、指導案検討に加えて、必要に応じて模擬授業を実施する。重点にかかわる手立てなどについて児童の反応を予想しながら協議する。

(イ) 授業整理会

ICTを活用し、可視化を図りながら重点ごとに視点を明確にして成果と課題、改善策を協議する。児童の学びの深まり、対話を通しての学びの広がり、教師の支援等について協議をし、授業改善や指導力向上につなげていく。

③相互授業参観

日常的な授業研究を進められるように、相互授業参観週間を設定する。児童の学びに対する教師の働きかけや、ゴールに向かう児童同士の協働的な学びの姿、他学年の学習内容や系統性などを知り、教師も児童も互いに学び合える機会とする。

④OJTの充実

学年会で教材研究の時間を確保するとともに、日常的に学年の教材研究を大切にしながら、教師の困り感を共有したり、すぐに授業で実践したりできるようにOJTの研修の機会を設ける。若手教職員の要望を反映した、授業力向上・学力向上のための内容などを計画的に実施する。

(8) 学習を支える基盤づくりの取組

①学習規律の徹底「ねぶっ子 授業の8つの約束」

学習の準備、姿勢、話し方、聞き方等、学習規律を8つの項目に焦点化した「授業の8つの約束」をもとに指導を行う。重点を「話す」「聴く」の2つに絞り、学期ごとに振り返りを行う。

②言語力の育成「おおねぶワード」「うなずきワード」「つつこみワード」

相手に分かりやすく、相手を説得できるように話すには、根拠を明確にする必要がある。「おおねぶワード」をいつでも意識できるよう全教室に掲示し、友だちの意見につなげる話型や考え・根拠・理由の表現の仕方を示し、相手意識をもった話し合いができるようにする。また、相手の意見をよく聞き、反応を返すことで、自分の立場や感じた思いをすぐに表出できるようにしたい。そのために相手への共感を示す「うなずきワード」や、相手の意見に対しての「つつこみワード」を活用し、話し合いの質の向上を促し、表現する子の素地を養う。

③基礎・基本の定着「朝学習」「パワーアップタイム」「家庭学習」

(ア) 朝学習

月・木・金曜は漢字や計算、火曜は全校読書、水曜は問いに正対する解答の仕方の定着をねらいとし

た、「読みチャレ」に取り組む。また月に1回、自己表現力を高めるねらいとして「ねぶっこトーク」を設定する。お題に対して、相手に自分の考えを伝えたり、反応しながら聞いたりすることに取り組む。

(イ) パワーアップタイム

長文読解や弱点克服のため、11月と2月、3月をパワーアップ月間として、3・4・5年を中心に活用問題に取り組む時間を設定する。

(ウ) 家庭学習の習慣化

年度当初、家庭と児童向けに「家庭学習のてびき」を配付し、主体的に学習する力の定着を目指して、児童が自ら学びを調整しながら計画的に進められるようにサポートをしていく。

④読書活動の推進

学年ごとに冊数目標を設定したり、必読書として選定したりすることで読書量を増やしていく。また、2週間に1回、図書ボランティアによる読み聞かせなども行い、読書に関する関心を喚起する。読んだ本の履歴がわかる「読書カード」も活用しながら、読書の質を高めていくと共に、家庭での読書習慣も推進していく。

(9) 研究の構想図

